

大学では英文科に在籍し、第二外国語はドイツ語でした。大学2年だった1994年9月20日に、書店でふと目にしたフランス語の入門書と辞書を買って、「ボンジュール」から独学を始めました。大学でのフランス語履修単位数はゼロで、以後、現在に至るまで独学です。他にこれほど長続きした趣味はありません。学生時代は毎日学費と生活費を稼ぐための単調作業のアルバイトをしながら、将来は研究と教育だけで食べていける人間になりたいと願っていました。非常勤とは言え、その目標を達成できたことを嬉しく思います。

しかし、プロの世界に入った以上は、プロの世界にいることに満足してはいけません。志の低い人間はそれよりもさらに低い実績しか挙げられず、ユニフォームを脱ぐ羽目になります。この厳しい世界で生き抜くためには、「フランス語が好き」といった憧れだけでは通用せず、自分の頭で考えて自分にしかできない個性的な仕事をする必要があります。「100点を取って目立つことができないなら0点を取って目立ればいい。平均点を取っても仕方がない。」という思いでやってきましたが、今のところ成功しているとは言いがたく、あれこれ試しては失敗するということを繰り返し、ついに四捨五入すると不惑を迎える今年になっても自分のスタイルを確立できずにいます。新しい変化球を覚えては打たれ、の繰り返しです。覚えたと思ったのはすべて錯覚だったのです。能力が乏しい以上、限られた能力を最大限に生かすための試行錯誤は一生続けるしかありません。

個性も大事ですが、プロにとって何よりも大事なことはグラウンドに立ち続けることです。好調時も不調時も、常にグラウンドに立たなければいけない。だから、みっともないと言われても、粗製乱造と言われても、学会発表と論文執筆を休まず続けることを心がけてきました。内容が乏しい上に数まで少ないのでは目も当てられません。また、プロの世界では、言い訳しようと、泣こうと、ダメなものは叩かれます。だから、堂々と発表し、堂々と叩かれることを心がけてきました。どうせ叩かれるのなら、せめて堂々と叩かれなければ惨めです。「自信なさそうにするくらいなら発表するな」ということです。

個性や自信は、根拠のないものであってはなりません。世間はPだと言う。自分は¬P (= Pの否定) だと主張する。これだけなら反抗期の子供にもできます。Pの否定¬Pを作る能力と、思ったこと口に出せる程度の精神力さえあればよいからです。学問の世界ではそれだけでは不十分で、¬Pという主張を裏付ける根拠を提出し、最終的には¬Pが根付く世界像を提示しなければなりません。なぜPではなく¬Pなのか。ここから先は精神論ではダメです。ひたすら勉強して考えるしかない。他の研究者の声に耳を傾けつつ、自分の頭で考える。編集委員になっても、それは変わりません。